



木頭ゆず

に宿泊しての2泊3日。座学もあるが、藤田さんの実家訪問もする。ご家族とも食事を共にし、自身が地元の人とどう接するのかも見せる。

「その姿を見ることは、自分が所属する企業の代表の、コアに迫ることですから」

木頭を知ることは、藤田さんを知ることと繋がっているのかもしれない。

藤田さんの原動力の源はやはり故郷を思う力。

「自分の可能性、選択肢を知った上で自分がどんな役割を担えば徳島に貢献できるのか、恩返しのできるのか、それを考えていくことが非常に重要だと思っています。」

今どこにしようが最後は徳島に住みたいし、子どもが生まれたら故郷で育てると決めています」

保育園の頃からワンパクだった。小4から始めた剣道の竹刀を分解して弓矢を作ったり、小学校から高校まで一緒だった仲良しの「虫博士」くんと一緒に虫を捕まえたり、二人で廃棄物の冷蔵庫をもらってきて分解、発電機を作ったり。人と違うことばかりしていた少年だったようだ。

「他人と比べられるのが苦手でした。僕には僕らしさがあるとも思っていました。僕から。だから、変わっている友人とばかり一緒にいましたね。その中で一番変わっていたのが、その虫博士。今は高校の理科の先生になっていて、今でも仲が良いですよ」

仕事の関係もあり、木頭にはしょっちゅう帰っている。

「木頭は終の棲家だと思っています。でも今は、故郷のことを思いながら自分の可能性を最大化すること、結果、幸せな人生はどこにあるのかを探究していくこと、これが一番大事なことじゃないかと思っています」

すでに現在、木頭での次の一手となる新規事業にもいくつか着手しているという。

「四国のチベット」とも言われるほど豊かな自然に囲まれた木頭の、自然環境への取り組みにも向き合おうとしている。



「木頭は標高も高く、川の上流にあって自然が豊かなところです。上流に元気があってこそ下流が潤います。僕は生まれた時から木頭の川で泳いだり、魚の生態系を見たりしているので思うことなんでしょうが、今は山も枯れて、川も枯れてきていると感じています。今、手を打たないと僕が死んだ5年後6年後においては大変なことになる。だからこそ、今後は自然環境にもフォーカスしたいと思っています」

冒頭の哲学の答えを見つけた気がした。

取材・文／北島由記子
インタビュー写真／永井守